第十講『苔の衣』

次の文章は、鎌倉時代に成立した王朝物語『苔（こけ）の衣（ころも）』の一節である。主人公の大将は、愛妻の死を悲しみ、両親と姉（中宮として入内（じゅだい）している）にそれぞれ手紙を残して、密（ひそ）かに出奔（しゅっぽん）し、出家するために比叡山（ひえいざん）に向かう。その翌日、胸騒ぎを覚えた大将の両親が、大将の住まいに使者を遣わして様子を尋ねるところから文章が始まっている。よく読んで、後の設問に答えよ。

京（きやう）には、(注一)殿（との）・上（うへ）何となく心騒ぎするやうにて、うちとけても(a)大殿籠（おほとのごも）らぬに、夢などもいと心得ずものさわがしきやうなれば、明けも果てぬほどに(注二)三条殿（どの）を尋ねきこえ給ふに、(注三)「昨日（きのふ）その御方（かた）へ渡り給ひし後は、いまだ帰らせ給はぬ」よしを(注四)大弐（だいに）の乳母（めのと）申したれば、「いかなる事にか」と御胸さわぎて、また内裏（だいり）を尋ねきこえ給へば、「昨夜（よべ）出で給ひにき」など聞こえさするに、いと心あわたたしきやうに思（おぼ）さるるほどに、大弐の乳母御出居（でゐ）の方（かた）を見るに、(注五)心得ぬ御手習ひ、常の事といひながらいとまがまがしきに、傍（かたは）らに御文（ふみ）二つあれば、(注六)書き付けのままに取りて参らする。殿・上は、文と聞き給ひて、御心落ちゐて急ぎ開（あ）けて見給へば、いとよく書きつけられたる事どもを見給ふに、①御心の内なのめならむやは。母上はものものたまはず、ひきかづきて、やがて伏し給ひぬる後、みじろきもし給はず、

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ただ亡き人のやうにぞものし給ひぬる。②あやしげなる子供のあまたあるだに親の心は皆かなしく思ひ捨て難くこそおぼゆるに、慰(なぐさ)むかたおはせず。院・(注七)内裏(うち)をはじめ奉りて、世の中にとりて、才(ざえ)・才学(さいかく)・みめかたちにつけても、またなくいみじき光とのみ誉(ほ)めののしられ給へる御有様を、行方(ゆくへ)なく惑(まど)はし給ひぬるは、げに時の間(ま)に限りあらむ御命もいかがとぞ見え給ふ。殿は、「今はさすがに残り少なくなりたる我らを(注八)見置きては、いみじからむ(注九)仏(ほとけ)の御迎へなりともいかでか(b)左右(さう)なく参り給ふべき。③いとかばかりまで思ひ惑はし給ひては、いみじく願ひ給ふらむ道の妨(さまた)げにもならずやあるべき。かくまで思ひ捨てられたる身は恥づかしくもつらくもあれば、いかでかく思はじ」と思し返せど、(注十)常よりも思ひ乱れつつ立ち給ひし面影(おもかげ)思し出づるに、まだしきに人悪(わろ)く恋しさ耐へ難くて、御声も惜しみ給はず、「何事をいとかくまで思ひて、さばかりあたらしかりつるさまをば、今はやつしや果て給ひぬらむ。④掌(たなごころ)の玉よりもなほ危(あや)ふく、朝夕(あさゆふ)の出で入りにつけて安き空なく、いたはしうのみ思ひ習はしたるに、⑤限りあらむ別れにてだに忘るる世あるまじきを、行方も知らず惑はし給へるには、(注十一)なほつらく」おぼえ給ふに、(注十二)「返す返す思ひ嘆かせ給ふな」とのみ書き給ひたる文字様(もじやう)、墨付きなど、物おぼえぬ心にも、今はいと限りと思したるにや、言ひ知らず見所ありて美し

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

きを、「かく（注十三）久しかるまじうてや、よろづかくのみ優(すぐ)れ給ひけむ」と、とにかくに足摺(あしず)りとかやもしつべくも惑ひ給へる御様ぞ（c）<u>ことわりなる</u>。（中略）

中宮もこの文御覧ずるに、あはれに悲しう思さるること限りなし。「常より殊に思し乱れたりし有様は、まことに怪(あや)しかりしかど、ただ例のこととのみ思ひつつ、はかばかしう聞こえさすることなどもなくて止(や)みにしよ」と頼むかたなくもの心細くさへ思さるる。同じ妹背(いもせ)と言ひながら、限りなく思ひ交はし給へる御仲なれば、げにいかで（d）<u>おろかに</u>思されむ。（注十四）姫君はかやうのことを聞き給ふに、（注十五）母上の折はさすがに幼くて、はかばかしう思し分(わ)きたる方(かた)もなかりしに、これはいとあはれに、我が行く末ものはかなく思されて、しほしほと泣き給ふを、（注十六）中将の乳母見きこえさするもいと悲し。帝(みかど)もかく聞かせ給ひて、「⑥<u>さばかりこの世に有り難かりしさまを、何事によりさしも思ひ捨てけむ</u>」と、あはれに思されて、押し拭(のご)はせ給ふ。

殿・上のいたく思し入りて、はかなき（注十七）御湯などだに見入れ給はで、日数経(ひかずふ)るを、かひなき御事はさることにて、⑦<u>これさへいと恐ろしく危ふくて、中宮も、もろともに慰めきこえまほしく思されて、御暇(いとま)申し給へど</u>、御気色(けしき)の常よ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

りも(e)__後ろめたければ__、許し奉り給はぬを、いと本意（ほい）なく思したり。

（『苔の衣』より）

〔注〕

（一）殿（との）・上（うへ）——「殿（との）」は大将の父である関白、「上（うへ）」は大将の母のこと。関白夫妻には、大将と中宮の二人の子がいた。

（二）三条殿（どの）——大将の住まい。

（三）「昨日（きのふ）その御方（かた）へ渡り給ひし後は、いまだ帰らせ給はぬ」よし——「昨日そちらに（大将が）お渡りになった後は、まだお帰りになっていない」とのこと。前日、大将は親しい人々に心の中で別れを告げるべく、両親や、内裏（だいり）の姉のもとを訪れ、その後ひそかに「三条殿」に戻り、出居（でゐ）（寝殿造りの建物で居間及び客間として用いられた部屋のこと）に書き置きの手紙を残し、出奔した。

（四）大弐（だいに）の乳母（めのと）——大将の乳母。

（五）心得ぬ御手習ひ、常の事といひながら——「心得ぬ御手習ひ」とは、手紙とともに大将が残した、出家を意味する和歌のこと。「常の事」とは、大将が愛妻を失った後、常に仏道に心を寄せていたことを言う。

（六）書き付けのままに取りて参らする——宛名の通りに、大将の両親と中宮にそれぞれ送って差し上げた、ということ。

（七）内裏（うち）——帝のこと。

（八）見置きて——見捨てること。

（九）仏（ほとけ）の御迎へ——出家後の大将を仏が浄土へ迎えること。

（十）常よりも思ひ乱れつつ……——前日に大将が訪問した際の様子を言う。

（十一）なほつらく」おぼえ給ふ——心の内の言葉が地の文に連続する表現。「なほつらし」とおぼえ給ふ」に同じ。

（十二）「返す返す思ひ嘆かせ給ふな」とのみ書き給ひたる——手紙の主旨を言ったもの。

（十三）久しかるまじうて——世に長くいられないために。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

（十四）姫君――大将の娘。中宮が引き取って育てている。
（十五）母上の折――姫君の母（大将の妻）が亡くなったとき。
（十六）中将の乳母――姫君の乳母。
（十七）御湯――重湯（おもゆ）や薬湯のこと。

問一　傍線部（a）から（e）はそれぞれどういう意味か、簡潔に記せ。

（a）＝

（b）＝

（c）＝

（d）＝

（e）＝

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問二　傍線部①「御心の内なのめならむやは」とは、誰の「心の内」がどのような状態であるというのか、わかりやすく説明せよ。

問三　傍線部②を、省略されている内容を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問四　傍線部③を、主語や目的語を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問五　傍線部④について、

（ア）「掌（たなごころ）の玉」とはどのようなものを表す比喩表現か、わかりやすく説明せよ。

（イ）「殿」は、何のことを「掌（たなごころ）の玉よりもなほ危（あや）ふく」と言っているのか、簡潔に記せ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問六　傍線部⑤「限りあらむ別れ」とはどういうことか、簡潔に記せ。

問七　傍線部⑥とほぼ同じ意味のことを言っている箇所を、本文中から五十字以内で抜き出せ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問八　傍線部⑦について、

（ア）「これさへいと恐ろしく危ふくて」とあるが、中宮は何を恐ろしく思ったというのか、「これ」の指し示す内容をわかりやすく説明せよ。

（イ）「御暇（いとま）申し給へど」とあるが、中宮は何のために「御暇」を願い出たのか、わかりやすく説明せよ。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十講　復習問題

①「左右なく」の解釈として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　類(たぐい)無きものとして　　イ　時期も選ばず
ウ　大いに喜んで　　エ　ためらわずに

②「ことわりなり」の解釈として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　あり得ることだ　　イ　当然だ
ウ　すばらしいことだ　　エ　礼儀だ

③「衣だに着ず、蓑笠に身をやつして、ここかしこ行ひありきける。」の傍線部はどのような意味か。最も適切なものを次の中から選べ。

ア　蓑や笠を身にまとって変装をして
イ　法師になって、蓑一つをうち着て
ウ　蓑笠がすっかりぼろぼろになって
エ　蓑笠だけしかないほどに困窮して

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　次の文章中の傍線部「劣りてやはある」の「や」の文法的意味として、最も適当なものを後の中から選べ。

言はまほしきことをもこまごまと書きつくしたるを見る心は、めづらしくうれしく、あひ向ひたるに劣りてやはある。

ア　当然　　イ　疑問　　ウ　推量　　エ　強意　　オ　反語

⑤　次の文章を読んで、後の**問**に答えよ。

かたほなるをだに、乳母やうの思ふべき人はあさましうまほに見なすものを、ましていと面だたしう、なづさひ仕（つか）うまつりけん身もいたはしうかたじけなく思ほゆべかめれば、すずろに涙がちなり。

問　傍線部「まして」の後には省略がある。補うべき内容として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　「子ども」と「君」を平等に育てたことは
イ　「君」を「まほ」に見なさなかったことは
ウ　「かたほ」である「君」を「まほ」に育てあげたことは
エ　「かたほ」である「子ども」を「まほ」に育てあげたことは
オ　「まほ」である「君」を育てたことは

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十講　模範解答

問一（a）おやすみにならないので
（b）ためらいなく
（c）もっともである
（d）いいかげんに
（e）気がかりなので

問二　大将の両親の心の内が、大将が書いた出家を知らせる手紙を読み、並一通りではなく悲しみに沈んでいる状態。

問三　見苦しい子供がたくさんいてさえ、親の心は、子供全員が愛しく見捨てられないと思われるのに、まして大将のような立派な一人息子なら、大将の両親はなおさら大切に思われており、その息子が出家した悲しみを慰める方法がおありにならない

問四　ひどくこんなにまで大将が私たち両親の心を乱しなさっては、大将が極楽往生をたいそう願っていらっしゃるとかいう仏道の妨げにもならないことがあるだろうか、いや、なるにちがいない

問五（ア）一番大切にしているもの
（イ）大将

問六　死別

問七　何事をいとかくまで思ひて、さばかりあたらしかりつるさまをば、今はやつしや果て給ひぬらむ。（四十四字）

問八（ア）両親が、息子の出家にたいそう嘆いて薬湯さえ飲まずにいるので、そのまま衰弱して亡くなるのではということ。
（イ）大将の出家に悲しみ沈んでいる両親のそばにいて慰めるため。

〈現代語訳〉

京では、殿と母上〔＝大将の両親〕がなんとなく胸騒ぎがするようで、安心しておやすみにならないので、夢などもまったく

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

わけがわからず何となく不安な感じなので、夜が明けきらないうちに三条殿〔＝大将の邸〕をお訪ね申し上げなさると、「昨日そちらに（大将が）いらっしゃった後は、まだお帰りになっていない」ということを大弐の乳母が申し上げたところ、「どういう事だろうか」と胸騒ぎがされて、今度は内裏をお訪ね申し上げなさると、「（大将は）昨夜退出なさいました」などと申し上げるので、たいそう気持ちが落ち着かないように思いなさるうちに、大弐の乳母が御出居の方を見ると、（出家を意味する和歌が書かれた）不審なむだ書きが、（仏道に心を寄せているのは）いつものこととはいいながらひどく不吉で、そばにお手紙が二通あるので、宛名の通りに（大将の両親と中宮に）それぞれ送って差し上げる。殿と母上は、手紙とお聞きになって、心も落ち着かれて急いで開けて御覧になると、たいそう丁寧に書き付けられた事などを御覧になると、（大将の両親の）御心の内（の悲しみ）は並一通りではない。母上は何もおっしゃらず、着物を頭からかぶって、そのまま横になってしまわれた後は、身じろぎもなさらず、まるで死んだ人のようにしていらっしゃった。見苦しい子供が大勢いる場合でさえ親の心はどの子もみな愛おしく見捨てがたく思われるのに、（まして大将のような立派な一人息子を出家で失った両親の心は）慰める方法がおありにならない。院や帝をおはじめ申し上げて、世の中の人にとって、才能・姿・容貌のどれをとっても、またとないすばらしい光とばかり褒め称えられていらっしゃった有様を、行方知らずにしてしまわれたのは、本当に定まった寿命も今すぐどうなることかとお見受けされる。殿は、「今はそうは言ってもやはり余命少なくなった私たちを見捨てては、慈悲深い仏のお迎えまでもどうしてためらいなく（浄土に）参られようか。（大将は）ひどくこんなにまで（私たち両親の）心を乱しなさっては、（大将が）たいそう（極楽往生を）願っていらっしゃるとかいう仏道の妨げにならないはずがあろうか、いや、なるにちがいない。これほどまで（我が子に）見捨てられた身は恥ずかしくもつらくもあるので、何とかしてこのように思い悩まないようにしよう」と考えを改めなさるけれども、いつもよりも思い乱れながらお出かけになった（大将の）面影を思い出されると、早くも体裁が悪いほどの恋しさをこらえることができなくて、お声も惜しみなされず（お泣きになり）、「何をたいそうこんなにまで思い詰めて、あれほど立派だった姿を、今は僧の姿に変えてしまわれたのだろうか。掌中の玉よりももっと気がかりで、朝夕の出入りにつけても穏やかな心地もなく、ただもう大切にといつも思っていたのに、死別でさえ忘れることも決してないのに、行方もわからずに（私たちを）悲しませなさるとは、やはりつらい」とお思いになるので、（大将が）「返す返すお嘆きなさいますな」とだけお書きになっている文字の様子や、筆跡など、（大将は）気も確かではない心の中でも、もう本当にこれが最後だと思われたからだろうか、言い

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

ようがないほど優れたところがあって美しいけれども、「このように世に長くいられないために、すべてこのように優れていらっしゃったのであろうか」と、何かにつけて地団駄とかを踏んでしまいそうに思い乱れていらっしゃるご様子はもっともである。

中宮もこの置き手紙を御覧になると、胸が詰まって悲しく思いなさることこの上ない。「（昨日大将が）いつもより特に思い乱れていらっしゃった様子は、本当に変だったけれども、ただいつものこととばかり思いながら、しっかりとお話し申し上げることなどもなく終わってしまったことよ」と頼りにする人もいなくなり何となく心細いとまでお思いになる。同じ姉弟といいながら、この上なく思い合っていらっしゃった仲であるので、本当にどうしていいかげんにお思いになるはずがあろうか。姫君はこのようなことをお聞きになると、母上が（亡くなった）時にはさすがに幼くて、しっかり分別なさることもなかったけれども、今度の場合はたいそうしみじみと、自分の将来も頼りなく思われて、しくしくと泣きなさるのを、中将の乳母は拝見してもたいそう悲しい。帝もこのようにお聞きになって、「あれほどこの世でまたとなく優れていた様子を、何が原因でそれほどまでに世を捨ててしまわれたのだろうか」と、悲しくお思いになって、涙をお拭いになる。

殿や母上はひどく思い詰められて、ちょっとした御薬湯などさえ目をお留めにならないで、日数が経ってゆくので、今さら仕方のないこと〔＝大将の出家〕はいうまでもなく、両親のことまでもたいそう恐ろしく危ぶまれて、中宮も、一緒にそばにいてお慰め申し上げたいとお思いになって、（帝に実家に退出する）お暇をお願い申し上げなさるけれども、（中宮の）ご様子がいつもよりも気がかりなので、（帝が）お許し申し上げなさらないから、（中宮が）本当に残念だと思われた。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

〔**重要単語**〕

○うちとく【**打ち解く**】…①溶ける。　②**安心する**。　③**男女が慣れ親しむ**。　④油断する。　⑤ひもの結び目などを解く。

○まがまがし【**禍禍し**】…①**縁起が悪い**。　②いまいましい。

○なのめなり【**斜めなり**】…①**ありふれたさま**。　②いいかげんなさま。　③（中世以降）格別だ。

○あまた…**たくさん**。

○かたち【**形・容・貌**】…①**姿**。　②**容貌**。　③美人。　④ようす。

○またなし【**又無し**】…**またとない**。

○ののしる【**罵る**】…①**大騒ぎをする**。　②評判が立つ。　③口やかましくいう。

○さうなし【**左右無し**】…①どうとも決まらない。　②**ためらわない**。

○まだし【**未だし**】…①**まだ早い**。　②**未熟である**。

○あたらし【**惜し**】…**惜しい**。もったいない。

○やつす【**俏す**】…①**目立たないように姿を変える**。　②**出家する**。

○ことわりなり【**理なり**】…**当然である**。もっともである。

○はかばかし【**果果し**】…①**すらすらとはかどる**。　②**はっきりしている**。　③**たのもしい**。

○ありがたし【**在り難し**】…①**めったにない**。　②すぐれている。　③**生きながらえにくい**。　④尊い。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十講　解答解説

〔解説〕

① 「左右なし」は、重要単語で「ためらわない」の意味。よって、正解はエ。

② 「ことわりなり」は、重要単語で「当然だ・もっともだ」の意味。よって、正解はイ。

③ 「やつす」は、重要単語で「目立たないように姿を変える・出家する」の意味。この場合、傍線部の後ろに、「行ふ」という単語もあり、こちらも「仏道修行をする」という重要単語。したがって、「出家する（＝法師になる）」の意味でとればよいことがわかり、よって、正解はイ。

④ 「**やは**」の「や」は「**反語**」から考えるのがポイント。文脈判断が必要であるが、この文も反語で訳してみてもおかしくないことから反語確定。よって、正解はオ。

⑤ 「**まして**」**の後ろの省略部分**は「**だに**」**の直前の内容と反対の内容**であると考えられる。「だに」の直前が「かたほ」について書かれているので、その反対語の「まほ」ならばなおさら、ということ。よって、この解釈がきちんとできているオが正解。ウとエは元が「かたほ」であるので、反対の内容ではない。元が「まほ」であるオが反対の内容である。文脈判断をしてもオしか不可である。

〔解答〕

①　エ　②　イ　③　イ　④　オ　⑤　オ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。